

卓 話

平成 24 年 6 月 5 日

『十八楼記』

伊藤善男会長

松尾芭蕉がこの美濃の地へ四回来遊していることは先ほどお話ししましたが、第二回目に岐阜に来遊しております。岐阜俳壇の隆盛は、大垣に劣るものでなく、その中心人物が、^{やすかわらくご}安川落梧でありました。



落梧は、岐阜本町の人で、京都と取引する呉服小間物商で、岐阜屈指の富豪であり、人格者であり、世の信望も厚く、岐阜俳壇の大御所でありました。

芭蕉の岐阜来遊も、落梧の度重なる鶺鴒見物の招きに応じたものでありまして、1688年（貞享五年）の六月に、岐阜公園の近くにある妙照寺の僧で俳人でもある^{きはく}己百の案内で来岐し、約1か月滞在しました。その挨拶句として

宿りせむ あかざの杖に なる日まで
を物された。

また、賀嶋鷗歩の招きで鷗歩の水楼で遊び、主人の求めに応じて楼名を選び、「十八楼の記」を書いた。

美濃の国ながら川に望みて水楼あり、あるじを加島氏と云ふ、伊奈波山後ろにたかく乱山西にかさなりてちかからず、また遠からず、……（省略）……

かの^{しょうしょう}瀟湘の八のながめ、西湖の十のさかひも、涼風一味のうちにおもひこめたり、若し此楼に名をいはんとならば、十八楼ともいはまほしやから、万延元年に「山本屋」という旅館の主人が鷗歩のもとめによって、水楼名をつけた「十八楼」の遺跡が廃絶したのを再興しよう一念発起し、屋号を十八楼と改称した。

この続きはまたの機会に……